

カルガモ ヒナ物語(その1・ヒナはどこから)

カルガモの「ヒナ11羽」が、「呑川」の池上地域に登場したのは、先月初め(2016/5/7)・・・このビッグニュースに、白石(呑川の会・副代表)さんが「呑川ニュース」を連続して発行して下さり、メールニュースでも流し、今回の会報「のみがわ」(83号)でも「3ページ半のぶち抜き特集」でお知らせしました。



その可愛らしさは、見るものを惹きつけてやみませんでした。

しかし、この11羽は、大雨で流され、ほどなく5羽まで減ってしまいました。



ここは、6/16の「養源寺橋」付近の犬走り上・・・ママとは見分けが付かないほど大きくなりました。でも、こんなに大きくなって、まだママといつも一緒です(6/24現在)。甘えん坊なのか、それとも

ママが子離れ出来ないのでしょうか・・・（どれがママか判別出来ますか・・・？）

さて、この「巣立ちヒナ」たち、いったいどうやって「呑川」にやって来たのでしょうか・・・？

その秘密を、呑川の会・会員の橋本さんが、取材をして明らかにしてくれました。次号の会報「のみがわ」（84号・8月下旬発行予定）に掲載の予定です。「えっ、そんなことがあったのか・・・」という「秘話」が語られます。どうぞ、楽しみに・・・

1) カルガモたちの産卵準備

今まで、この「呑川レポート」で、何回となく「カルガモ」のことは報告してきました。

今回、私はこの「橋本レポート」を契機に、また別の視点でカルガモの「ヒナ」たちの様子を追ってみることにしました。



カルガモは「渡り鳥」ではなく、「留鳥」ですが、一定の範囲で移動して暮らしています。「呑川」には、秋から冬にかけて多くやって来て、「集団」で過ごしています。



でも、やがてお気に入りの「ペア」が出来て、いつも一緒に、呑川河床の藻類を突く姿が見られるようになります。



ですから、ペアが「交尾」する姿も見られるようになります。(久が原地域にて)しかし、呑川には「巢材」となる植物も少ないですし、「巢」を作る場所もほとんどありません。多くの方から、「いったいどこで卵を産むの？不思議ですね」と聞かれます。そこで、カモたちの生態を描いた「絵本」を参考に、ちょっと見てみましょう。私が娘たちに読んで聞かせ、その後、今でも、孫たちに読んで聞かせている本はロバート・マックロスキーの「かもさん おとおり」です。世界中の子どもたちから親しまれ、愛された本ですので、みなさんも読まれた方は多いと思います。



これは、カルガモではありませんが、ボストン郊外を飛ぶ「マガモ夫妻」です。産卵期が近くなると、こうしてペアで産卵場所の下見に出掛けて行くのです。「呑川」のカモたちもペアが成立すると、近所の「洗足池」や「小池」、「洗足流れ」や「多摩川」などに出掛けるのでしょう。

(「オナガガモ」などの「渡り鳥」は、ペア群がほとんど成立すると、一斉に繁殖地に向けて飛び立ち、「呑川」から姿を消します。)



良い産卵場所を見つけると、巣材を集め、卵を産んでいきます。毎日、1ヶずつ・・・マガモの場合、マックロスキーが描いたように、8ヶ位、場合に依っては10ヶも産むことがあるようです。カルガモは少し多く、10ヶ位が多く、場合に依っては12ヶも産むようです。こうして、全てを産み終えると、「抱卵」をし、卵を温め始めます。ですから、バラバラで無く、一斉に「ふ化」をするのです。

しかし、この絵のママの姿は、羽根がほとんど無く、裸に近いように見えます。

これが、「マックロスキー」作品の素晴らしさなのです。

「マガモ」は、産卵をする頃になると「換羽」と言っ、羽が抜け替わるのです。この時期は飛ぶことを止めて、「抱卵」をして卵を温めることに専念するので、この時期に、新しく強い羽に切り替わるのです。スズメなどは、1枚1枚、少しずつ抜け替わりますが、マガモは一斉に集中して抜け落ち、新しい羽に切り替わります。「マックロスキー」は、この絵で、それをきちんと表現しているのです。

日本の作家の作品は、これがカルガモなのか、オナガガモなのか、カモらしいことは判っても、その種類までは不明な作品が多く、羽の模様も、エサの採り方も、飛び方も、他の動物との関係も、棲息する周りの環境も、無茶苦茶なモノが多いのは残念です。

そもそも、日本の絵本作家は、美術系大学を出た若いお嬢さんが多く、自分が絵が好きなので、それを生かした仕事として「絵本」を作ってみたいという動機が中心です。ですから、自然や生きものについて何も知らないどころか、それを正確に描くこと自体を大切に思っていないのです。強いて言えば、「たかが子どもなので、この程度で良い」と「上から目線」で描いているのです。悲しいばかりです。

2) 呑川における「産卵場所」は・・・

さて、「呑川」では、本当に産卵場所は無いでしょうか・・・？これも「マックスキー」作品から見てみましょう。



ここはボストンですが、その中心を流れる「多摩川」のような大きな川で、立派な橋が架かっています。そして「橋脚」の周りに「中州」が出来て、その「草地」に「巣」が作られ、メスが抱卵をしています。オスは、少し離れた場所で、水を呑んだりエサを食べたりしています。



ここは「多摩川」の「丸子橋」ですが、「橋脚」の下流側には大きな「中州」が広がっています。

ただこの「中州」はまだ十分発達しておらず、「草地」にはなっていません。マックロスキーは、こういう場所に「中州」が出来る事を、良く理解しているのです。

さて、マックロスキーが描いた上の絵のように、「草地」で「抱卵」したり、そのそばでオスが採餌をするような光景が「呑川」で見られるでしょうか・・・



ここは「呑川」の「道々橋」付近です。両岸には「植栽帯」が設置され「草地」になっており、その周辺に「中州」ではありませんが、「川原石」が広がっています。そして、よく見ると、「矢印」の先に見えるように、「草地」にカルガモが、「川原石」にも別のカルガモがいます。



「草地」にいるカルガモは、じっと動かず、あたかも「抱卵」しているように見えます。



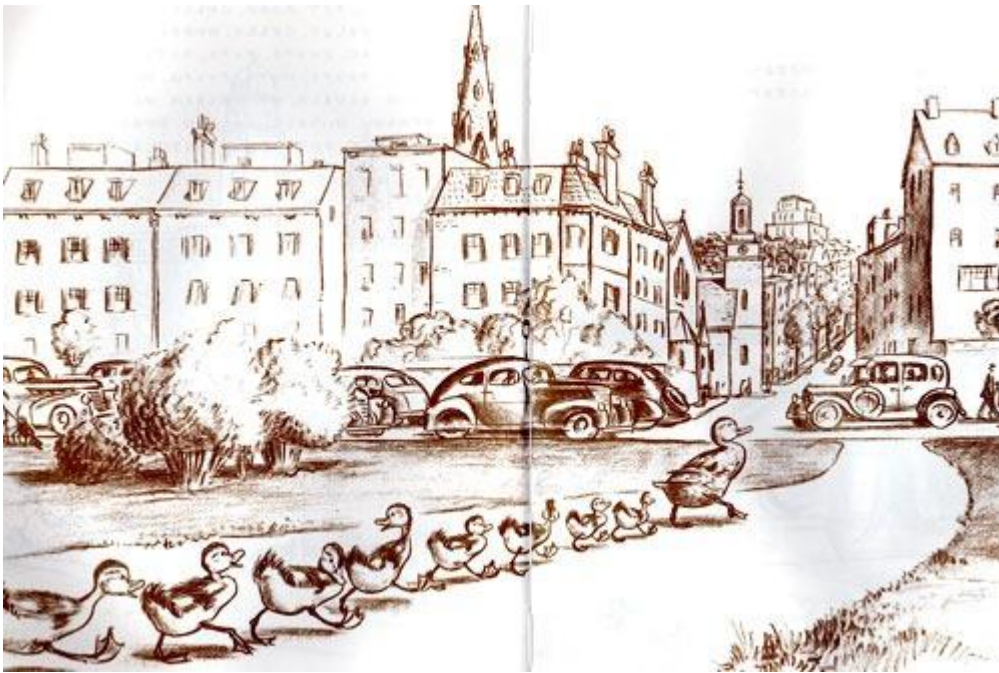
そして、「抱卵」しているメスのそばで、オスが水を呑んだり、採餌をしています。あまりにも「マックロスキー」の描いた情景と同じで、私は釘付けになってしまいました。この日は先月末（2016/5/28）ですが、カルガモのヒナたちを探しに行き、再び戻った3時間後、まだ同じ様子で、メスはじっと「草地」に座ったままでした。気になって、翌日（5/29）も見に行きましたが、なんと同じスタイルのまま・・ますます「抱卵」の可能性を感じ取りました。

しかし無情にも、さらにその翌日（5/30）の午前中は、土砂降りの激しい雨が降りました。雨が止んだ午後、とても気になって見に行くと、もうオスもメスも見当たらず、「草地」を双眼鏡で覗いても「卵」らしいものも残っていませんでした。

もし、観察を始めてから1週間ほど雨が降らなければ、どうだったでしょう？私が「マックロスキー」の描いた情景に強い印象をいただいていたので、そう思っただけなのかも知れません。「卵」は暖めてこそ、ヒナにかえります。冷やして「ふ化」する卵は無いと思います。そう考えると、「呑川」のこの場所のように、雨が降ると増水して、卵がすぐ冷やされる環境では、「ふ化」はしないと思われま

ただ、もう少し広い「草地環境」と、多少の雨では冠水しない「微高地」を作ってやるなどの配慮をすれば、なんとかならないかと感じさせられました。「呑川生まれ」のカルガモのヒナたちが誕生するのを夢見ています。

3) 「大通り越え」と、人の思いやり・・・



カルガモのヒナが「ふ化」すると、お母さんは食事が容易に出来る場所へヒナたちを連れて行きます。カルガモのように「多産」では、ヒナの一匹、一匹にエサを運んであげるのは難しく、ヒナ自身が自分で「採餌」しなければならないのです。しかし「マックロスキー」が描いたボストンの街のような都会では、池や川に向かう途中に「大通り」があって、行き交う車をぬって進むのは大きな危険が伴います。

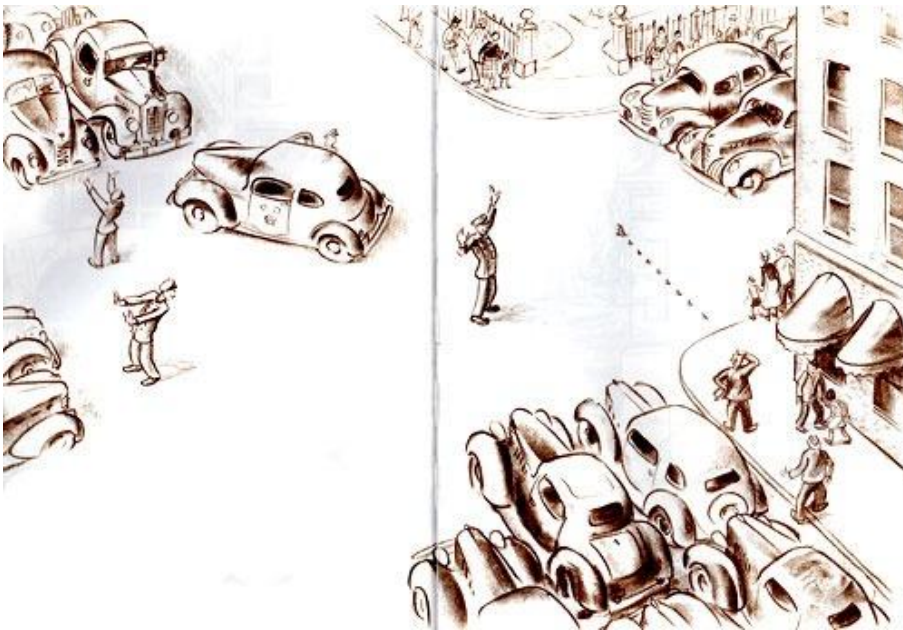
「呑川」では、どうやってヒナたちがたどり着いたのか・・・その経過が、地図と共に「橋本レポート」で語られています。背景に、ヒナを見つめる人間の大きな愛情がありました。ぜひ、次号会報（「のみがわ」84号）を見ていただきたいと思います。

ただ、「国道」（第二京浜国道）の横断に当たって、警察に相談して下さった優しい方がおられたようですが、断られたとのこと、残念なことです。

いっぽうボストンでは・・・



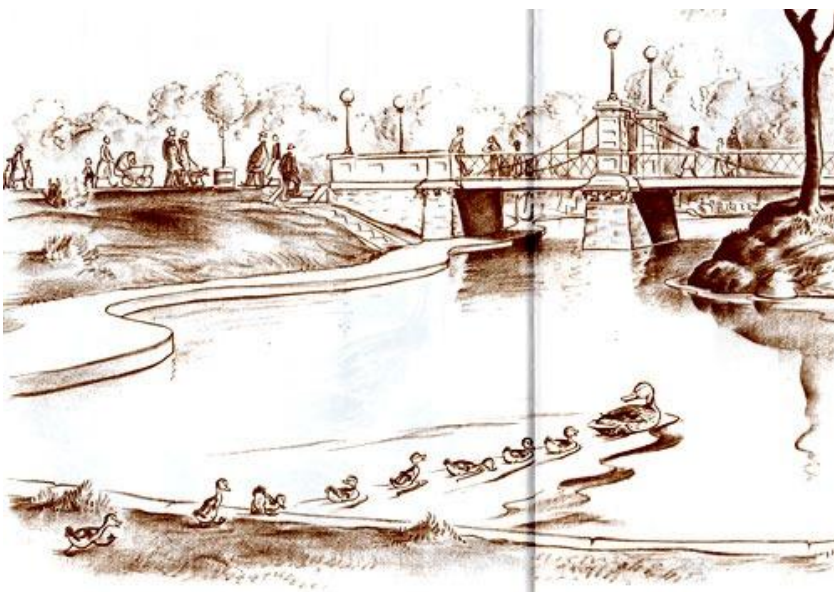
おまわりさんが飛んで来て、車を止めて、ヒナたちを安全に通してあげるのは、当たり前で、マックスキーは、そういう日常的な光景をさらりと描いています。しかし、これは交通量の少ない道路の例です。国道のような大きな交差点ではどうなのでしょう・・・？



車が、四方から押し寄せるようにギッシリ詰まっています。交差点の中央にはパトカーが出ています。おまわりさんは、3人も出て、車を誘導しています。こうして、ヒナたちの行列を通してあげているのです。

この日本では、考えられない、動物への接し方や愛情がここには現れています。（三井物産ビルの敷地にある池でヒナが生まれ、皇居のお堀へ行進する時は警察が誘導してくれるそうです。大きな会社が要請すればそういうことがあるようですが、この日本では個人の要請では無理のようです。しかし、この会社は、専任の「カルガモレディ」を採用しているとのこと、ビックリです。）

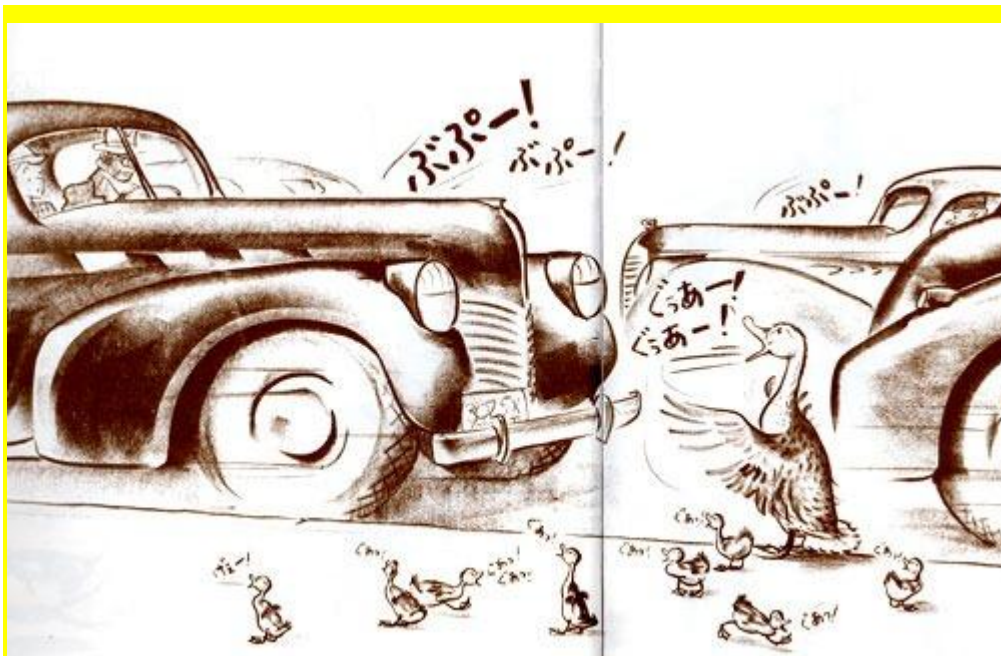
しかし、こうして「国道越え」を警察に断られても、思わぬ工夫と努力で、ヒナたちは「呑川」に導かれたのです。その努力とはどんなものだったのか・・・それも「橋本レポート」には描かれています。ぜひご覧いただきたいと思います。



ボストンの大通りを越えて、ヒナたちはようやく水辺に到着しました。まずは、ホッと一安心です。しかし、我が「呑川」ではフェンスが張られ、しかも飛び降りるのはあまりにも深い護岸の高さがあります。誘導したママは、呑川に着いたらすぐ飛んで水面に降りたようです。残されたヒナたち・・・、怖くて降りられないヒナたち・・・は、いったいどうしたのでしょうか？
この局面でも、人間は再び大きな援助をしてくれたのです。この時の状況も、また「橋本レポート」は描いています。次号会報（のみがわ 84号）を、ぜひ楽しみにご覧いただきたいと思います。

4) 中原街道で・・・

カルガモのヒナが現れるのは「呑川」だけではありません。「小池」でも、毎年数回ヒナの誕生が見られ、「洗足流れ」でもヒナが誕生しています。そして、ヒナたちの行進も行われています。私が、呑川のヒナを撮影しているとき、サラリーマン風な紳士が、「先日の、中原街道を渡るヒナを見られましたか？」と、声を掛けてくださいました。



「小池」からやって来たというヒナの行列に、何人かの方が見守りながら「中原街道」に着いたそうです。ここを越えれば、目の前には「洗足池」があるのです。カルガモたちは立ち往生し、グワツ、グワツと鳴いたそうです。車も、「危ないよ」とばかりクラクションを鳴らしたそうです。お互いに立ち往生です。その時、一台のタクシーが止まったそうです。それに合わせて、他の車も一斉に止まってくれたそうです。こうして、ヒナ行列は無事に「中原街道」を渡り、「洗足池」へと入って行ったそうです。その間、わずか1分前後だったとのこと。渡り終えたとき、大きな拍手は湧かなかったようですが、数人の方が、静かにパラパラと拍手をされたとのこと。生きものたちに優しい社会になってくれればと思います。さて、こうして「呑川」にやって来たヒナたちに、どんな運命が待っていたのでしょうか・・・？それは次号の「呑川レポート」に続きます。

（なるべく、間隔を空けないようにレポートの発行を急ぎますが、写真での説明を重視していますので、説明に合う写真が撮れるまで、遅くなることがあります。結局は、いつも遅くなるのですが・・・）

----- (当面の予定) -----

まもなく関東も「梅雨」が明けるでしょうか・・・会の活動にもぜひお越しください。

- ・「東京都河川局計画課」訪問 6/30 (木) 12:55 都庁第2本庁舎6階
- ・「呑川源流・深沢6丁目流れウォーク」 7/2 (土) 10:00 駒沢大学駅
- ・「東工大・社会工学科学生との打合せ」 7/11 (月) 13:30 西9号館
- ・「呑川の会・定例会」 7/14 (木) ふれあいはすぬま第2集会室 13:30
- ・「呑川ネット・ランドデザイン検討会」 7/27 (水) 10:00 生活センター

-----photo essay by-----

(呑川の会) 高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com